



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	世界は「ポスト2020」の日本にこそ注目している
Author(s)	石黒, 侑介
Citation	North east think tank of Japan, 108, 1-1
Issue Date	2020-04-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78475
Type	journal article
File Information	nett108-1.pdf



羅 針 盤

世界は「ポスト2020」の日本にこそ注目している

北海道大学観光学高等研究センター 准教授
バルセロナ大学ホテル・観光学院 連携客員教授

石 黒 侑 介



デスティネーションの「オールタナティブ・ターン」

スペインの観光政策について研究する中で様々な関係者に出会ったが、カタルーニャ州観光庁長官パトリック・トレント氏の「オリンピックによって観光客は急増するがそれは『薬』の効果に過ぎない。問題なのはその間、誰もがまちの将来を考えることを止めてしまうことだ」という言葉が今でも忘れられない。バルセロナはかつて MICE など商用観光のデスティネーションであったが、オリンピックを契機に急速にレジャー観光が拡大し、今日ではオーバーツーリズムの象徴にまでなってしまった。

「大量生産＝大量消費」に対する「もう一つの」選択肢、つまりより個人化、多様化した生産と消費の形態への転換を「オールタナティブ・ターン」と呼ぶ。そして、これは観光にも当てはまる。特定のデスティネーションへの訪問需要が量的に拡大すると、徐々に定番化、標準化した訪問経験「じゃないほう」に対する需要が生じる。原宿と「裏」原宿の関係と言えれば分かりやすいだろうか。世界的なデスティネーションは、この「オールタナティブ・ターン」への投資を強化しつつある。

バルセロナの場合、オリンピックから20年を経て、観光に対する住民の反発を契機に、つまりまちに気づかされる形で「オールタナティブ・ターン」への対応が始まった。冒頭の言葉はこの「気づかされるまでの年月」に対するトレント氏なりの自省だろう。ショッピング・ツーリズムやナイトタイムエコノミーを無闇に推進するのではなく、郊外のワイナリーや第一次産業との連携、持続可能性や生物多様性への取り組みを都市観光の魅力として位置づけようとする近年のバルセロナの政策には、こうした背景がある。

「速筋」だけでなく「遅筋」も鍛えたい

さて、そのようなことを考えながら本稿のタイトルをつけたが、ここ数週間で「日本にこそ注目」の意味が変わってしまった。新型コロナウイルスの猛威は世界中に拡大し、もはや訪日中国人旅行者の減少という話に収まりそうにない。この混乱が続くとなると、訪日外国人旅行者数の対前年割れも現実味を帯びるだろう。

こういった状況になるとインバウンド観光市場におけるアジアのシェアの高さを批判的に論じる声が途端に噴出する。北海道内でも昨夏以降「やっぱりアジアはリスクがある」、「欧米市場に拡げるべきだ」といった議論を頻繁に耳にするようになった。

しかしながら観光地経営論のセオリーから見ると、こうした指摘は全般的に外れた。北海道も日本も、そもそも資源の質と特定市場との親和性を重視したニッチ戦略を採用して今日のポジションを築いてきた。市場を多角化できるのであれば、とうの昔にそうしていた。市場の多角化は、質・量ともに豊富な資源を有するリーダーがシェア独占を狙って採用する戦略である。

そもそもインバウンド観光には外発的なリスクがつきまとう。わずか15年の間に外国人旅行者数が6倍近くにまで成長したのは官民の努力の賜だ。ただし、旅行者数の増加に貢献してきたビザの緩和、官民一体のプロモーション、航空輸送量の拡大といった施策は、どちらかと言えばアジアの成長力を訪日旅行需要の成長に素早くつなげる「速筋」だった。オリンピックもその最たるものと言える。

真の観光立国になるには、観光で国を「立てる」にとどまらず、「立ち続けさせる」ための「遅筋」が必要である。それは安易にリーダー戦略を標榜することではなく、ニッチ戦略の中で「オールタナティブ・ターン」に対応していくことではなかろうか。ゴールデンルートの国際的な競争力はこれからも揺るがない。しかし同時に、日本というデスティネーションがニッチ戦略の中でリスク耐性を育てていくためには、「じゃないほう」の存在が必要だ。今こそ地方の出番である。

オリンピックは一大イベントである。しかしそこでまちの将来を考えることを止めてしまえば、先人に倣うことができない。世界は「ポスト2020」の日本にこそ注目している。日本に向けられたまなざしの先に、北海道や東北はあるだろうか。